

石井忠雄作 クリスマス・ドラマスペシャル

# 戦場のクリスマス」

< 前編 >

## 第1場 “死の家”

エリオット中尉(ナレーション) わたしの名はクリス・エリオット。25歳のイギリス陸軍中尉です。わたしは当時、タイのクワイ河流域にある日本の捕虜収容所にいました。今から約3年半前、太平洋戦争が始まって間もない1942年2月、怒涛の勢いで進撃してきた日本軍によって、シンガポールが陥落した時に、イギリス軍の中隊長であったわたしは、捕らえられ、この収容所に送られてきたのです。底でわたしたちは、夜を日に接いで鉄道施設の突貫工事に従事させられていました。それは、日本軍が泰緬鉄道と呼んでいた、タイとビルマを結ぶ全長400キロに及ぶもので、それには我々が「戦場に架ける橋」と呼んだ、クワイ河の鉄橋架設工事も含まれていました。

(効果音) (工事現場、発破の爆発音。土を掘る音。)

ナレーション それはまさに悪夢のような大工事でした。ひそかに聞いたところによると、敵はこの工事のために、我々連合軍捕虜を各収容所から総動員し、その数は5万とも7万とも言われ、それに30万はいるかという現地人を強制重労働に駆り立て、規模からして優に5、6年はかかる大工事を、1年で完成させようという無謀極まるものでした。

日本兵 A おい、ぼやぼやするな！ サボって工事を遅らせようたって、そうはさせんぞ。

高橋中尉 大佐殿。では発破をかけます。斎藤軍曹、ボタンを押せ。

斎藤軍曹 あ、でも...、まだ捕虜たちがそばで働いていますが。

高橋中尉 構わん。捕虜の5人や10人とお捕まえてくりゃ、いくらでも補充がつく。それより、一日でも早く橋を架けなきゃならん。命令だからな。

ナレーション そう言ったのは、収容所副所長の高橋中尉でした。彼は「鬼のタカハシ」として、我々に恐れられていました。

高橋中尉 よし、押せ！

(効果音) (「ドーン」と発破の音)

ナレーション その時、13人の仲間が岩の下敷きになって死に、二十数人が負傷したのです。その中の一人がわたしでした。日本兵は、生きている者、死んだ者も一緒に、今わたしがいる病院に運び込ませ、死んだ者は米俵に入れて積んでおき、しばらくすると、どこかに運んでいきました。ここは、「病院」とは名ばかりで、病人は土間に寝かせられ、雨が降れば、泥沼のような中に、何の薬も与えら

れず、長時間横たわっているのです。こうして一日に何人も、いえ、事故などの日には何十人も仲間が死んでいきました。

- エリオット  
ナレーション (モノローグ)ジム…。ピート、お前もか..。  
わたしは、骨と皮になって、雨の中に冷たく横たわっている戦友の姿を見ているうちに、敵日本軍に対する憎しみと怒りで、背筋からブルブル震えてきました。その時、わたしは仲間の英軍兵士のこんな声を聞いたのです。
- イギリス兵 A おい、また無言のお仲間だよ。死人でも、仲間がいれば気も紛れるってもんさ。
- 兵 B お前も間もなく米俵入りだな。うっかり寝てなんかいると入れちゃうぞ。それにしても、ここにいるやつらは、生きていても希望がないだろうに、よく頑張っているねえ。
- 兵 A とにかく生きてりゃ、こっちは助かるよ。死ねば重い死体を運ばなくちゃあならないからな。さて、ジャップにブン殴られないうちに、あの俵、運んどくか。
- エリオット  
ナレーション (モノローグ)こ、これが、生死を共にしてきた戦友に対する言葉か。人間性を失っていたのは、敵だけではありませんでした。わたしは、この極限状況の中で、いつの間にか自分のことしか考えられなくなっている仲間の姿を目の当たりにし、心がうそ寒くなるのを覚えました。そんな時、わたしのもとに一人のイギリス兵が訪ねてきました。

## 第2場 ダンスとの出会い

- ダンス やあ、中隊長。ここにいらしたんですか。この収容所にいらっしゃると聞いていたので、探していたんですよ。
- エリオット 君は...？
- ダンス 中隊長は覚えておられないと思いますが、シンガポールが陥落する直前に、あなたの隊に配属されたダンス・クリフォードです。わたしは、あなたの部隊に配属になったことを誇りに思っていますよ。
- エリオット ああ、そうだったか。しかしわたしには何の力もないよ。ただこうして寝ていて、死ぬのを待つだけだ。
- ダンス かなりひどいケガをなさっているようですね。左足は...なくされたんですか？
- エリオット 発破でね。“九死に一生を得た”というやつだが、どうせ死ぬなら、あの時、ひと思いに死んでいたらよかった。
- ダンス 中隊長、足1本ぐらいで、何を弱気なことを。もう1本は無事じゃありませんか。
- エリオット そうじゃないんだ。アメーバ赤痢と熱帯性潰瘍かいようにやられて、体が動かないんだ。
- ダンス じゃあ今日からわたしが介護しますよ。わたしも病気がりですが、労働は夕方ですから、昼間は来られません。また、わたしの仲間に言って手伝ってもらい

ますから。

ナレーション それから、彼は時々来て、わたしの体をふいたり、おかゆなどを作ってきてくれました。彼とその仲間はチームを作り、作業の合間を縫って、病人たちの看護をしているようでした。マクドナルド・スミス少尉は、そんな仲間の一人でした。

エリオット ああ、いつもすまん。お陰で大分気分がいい。ところでマック、わたしはこの間、イギリス兵が日本兵の残飯を奪い合って、仲間を殺してしまったという話を聞いたが、本当かね？

マクドナルド 中尉殿。残念ながら本当です。この収容所にいる仲間は飢えているのです。自分が生きるのに精一杯なのです。彼らがかわいそうです。うっかりするとシャツや靴下、そして毛布まで仲間に奪われてしまうのです。

エリオット そうか…。人間は変われば変わるものだなあ。しかし、君たちはどうしてみんなのために働いているんだね？

マクドナルド わたしはイエス・キリストを信じています。そして、イエス様が「あなたの隣人を愛しなさい」と言われた命令を実行しているのです。

エリオット ダンスもかい？

マクドナルド そうです。わたしたちの仲間は全員そうです。

ナレーション わたしは信じられませんでした。わたしも、子供のころは教会に通っていましたが、それなりに神様やイエス・キリストを知っていました。しかし大人になってから、宗教というものが自分の理性に受け入れられず、それは学問がなぐ無知な人間か、自分を頼りきれない弱いやつのものだと思っていました。しかし今、この“収容所”という死と隣り合わせの共同生活の中では、教養があり、社会では地位もある者たちは、自分のことしか考えず、一方では、弱者と思われるクリスチャンが、人のために生きている。この違いは、一体どこから来るのだろうか？ わたしは、クリフォードがやっと来た時に、聞いてみました。

エリオット ダンス、君がクリスチャンだってことをマックから聞いたよ。君らの親切には心から感謝してる。だが僕は今まで、自分の考えに従って生きてきた。自分の夢、自分の幸せ、自分の満足のためにだ。しよせん、君らもそうじゃないのか？君らの親切は、君ら自身の満足のためじゃないのか？

ナレーション しかし、クリフォードは何も言わず、ほほえんで、わたしの身の回りをすると行ってしまいました。

それから数週間、クリフォードたちの介護のお陰で、わたしは体力が付き、体が起こせるようになりました。時にはいざって、病院の出入り口まで出ることもできました。

ダンス 中隊長、ずいぶんよくなりましたね。今日は卵が手に入りましたのでお持ちしました。どうぞ召し上がってください。

エリオット ああダンス、ありがとう。本当に感謝する。ところで、この間の答えをぜひ聞かせてくれ。何でそんなことができるんだ？ 君たちはイエス・キリストを信じていると言うが、キリストを信じれば、そんなことができるのか？

ダンス 中隊長、わたしも以前は中隊長と同じに、自分だけを頼りに生きてきました。両親がクリスチャンで、そのことでいろんなやりたいこともできず、子供心にずいぶん悲しい思いもしました。しかしある時、わたしは母の秘密を知ったのです。わたしの母の背中には大きな傷の跡がありました。その訳を、母は生前わたしに一言も言ったことはありませんでしたが、わたしが高校を出る直前、母が死んだ時に叔父が話してくれました。わたしは小さかった時、暖炉にかかったナベに触ってひっくり返したそうです。大やけどをしたわたしの体のために、母は生きた自分の皮膚を提供してくれたのです。わたしはそれで命拾いをしましたが、母は文字どおり見を削ったわけで、とても苦しい思いをしたそうです。それを聞いた時に、わたしの中で何かが変わったのです。自分がこれまで母のどんなに大きな犠牲によって生かされてきたかを知った時、自分勝手な生活をしていた自分の命を救うために、キリストが十字架にかかって身代わりになられたということの意味が、何て言うか、”体で”分かったのです。そして、あの母以上の苦しみを、このわたしのために味わわれたイエス・キリストを信じて従っていこうと決心したのです。

エリオット ...そうか。よく分かったよ。わたしはイエス・キリストを観念的にしか知らなかった。だが君の話の話を聞いていると、キリストを信じるということは、何か、人の生き方に決定的な意味を持つものだという気がしてくる。とりわけ、このような、死を毎日見つめて生きるような状況の中ではね。

ダンス そうなんですよ、中隊長。わたしたちには、限られた、本当に限られた命を、どのように生きるかという重要な課題があるんです。実は、今わたしは一つのことを計画しています。2か月後のクリスマスを、みんなでお祝いしたいんです。所長や高橋中尉に許してもらえるかどうか分かりませんが、何とかして実現したいと思ってます。たとえ明日をも知れない命だろうと、我々を真に人として生かして下さるために、神のみ子が地上に来られたクリスマスを、みんなでお祝いしたいんです。中隊長も元気になって、心からお祝いできるように、頑張ってください。

ナレーション それから数日後、わたしは仲間からあることを耳にしました。

兵士 A マックのことを聞いたかい？

兵士 B ああ、あの介護チームのだろう？ 聞いたよ。死んだんだってな。

兵士 A ああ。なんでも病気の相棒に自分の食物を皆与え続けていたんだらう。自分は何も食べずに黙って重労働に就いていたんだってな。相棒の病気は治ったが、やつが死んでしまった。

兵士 B 偉いなあ。仲間のためにそこまでできるなんてさ。  
ナレーション わたしの中に衝撃のようなものが走りました。  
エリオット (モノローグ) マックが…。死んだ…。  
ナレーション わたしは、あの落ちくぼんだ目の中にも、いつも穏やかな笑みを絶やさなかったマクドナルドの顔を思い浮かべました。  
エリオット (モノローグ) 命を懸けて友のために何かをする。 いや、友のために喜んで命を捨てる。マック、君はなぜそんなことができたんだ？ どうして君は、たった一つの命を… マック！ (嗚咽)  
ナレーション ふいにわたしは泣き出しました。冷え切った胸の奥底から、温かい何かが込み上げてきたのです。そしてわたしは、自分の中に長い間忘れていた、懐かしい言葉をつぶやいていました。  
エリオット (モノローグ) 愛…。愛か…。  
ナレーション その時、わたしの中で、マックの顔が、十字架のキリストと重なりました。クリスマスの際は近づいていました。

< 後編 >

ナレーション 1943年のクリスマスを前に、収容所の中に何かが起こりかけていました。それは、ダンス・クリフォードやマクドナルド・スミスたちの行為を通して、人々の心の中に目覚めた、“愛のリバイバル”とも言うべきものでした。マクドナルドの死は、ほかならぬわたしの魂の中に、イエス・キリストへの信仰を呼び覚ましたのです。  
わたしには、信仰についてまだ分からないことがたくさんありました。しかし、少なくともわたしは、人を極限状況の中でも生かす力は、憎しみではなく、あのキリストの十字架に表された神の愛であることを知ったのです。わたしは、その時から聖書を読み始めました。それと同時に、収容所の中でキリスト教の集会が始められました。そこでは、多くの人が集まり、真剣に語り合いがなされました。  
兵士 A では、神様がいるなら、どうして我々に何もしてくれないのですか？  
ダンス それは、きっと神様にお考えがあるからでしょう。神様は、わたしたち一人一人にご計画をお持ちなのです。だれ一人、神に見放された者はいないのです。たとえ動くことはできなくても、神は愛し、そのところで力を与え、生かしてくださっているのです。  
ナレーション やがて仲間たちは、その心に芽生えた愛を、互いに好意を通して示し始めました。人々は食べ物の奪い合いをやめ、他の人々のために何かをしてやろうとするようになったのです。  
兵士 A おい、スコットのことを聞いたかい？

兵士 B うん。あいつは、軍隊に入る前は大変なワルだったらしいな。

兵士 A ところが、この間、病気のスチュアートのやつに、自分の毛布をくれてやったそうだけ。

兵士 B そればかりか、お礼にもらった時計をお金に換えると、卵やパンを買って、他の病人に配っているそうだ。

兵士 A 3 号棟にアイザックてのがいるだろう。やつは器用だから、エリオット中尉に義足を作ってやったそう。義足があれば、自由にどこにでも行けるからな。

兵士 B 収容所も変わったなあ。それに、今年はクリスマス・パーティーができるように、クリフォード少尉殿が高橋中尉に掛け合ってくれるそうだ。うまくできるといいな。

ナレーション こうして、皆が明るくなり、クリスマスが待たれるある日、クリフォードが訪ねてきました。

ダンス 中隊長、喜んでください。クリスマス・パーティーの許可が下りました！

エリオット そうか！ それはよかった。よくあの高橋が許可したな。

ダンス ですが、わたしはしばらくよその収容所に行くことになりました。いつ帰れるか分かりません。

エリオット そうか。残念だなあ。クリスマスを一緒に祝おうと思っていたのに。でも、戦争が終わったら、国に帰り、2 人で伝道しようや。そのときは、盛大にイエス・キリストの誕生を祝おう。

ダンス そうですね。中隊長、絶対に死なないでくださいよ。そして、今言ったことを忘れないでくださいね。では、またお目にかかる日まで、ご機嫌よう。

ナレーション 1943 年 10 月。我が軍の同胞と、現地の人々のおびたしい犠牲の中で、5 年はかかると言われた鉄道工事は、わずか 1 年 3 か月あまりで完成しました。それに伴ない、労働も楽になったので、クリスマスの準備もはかどり、いよいよクリスマスの当夜を迎えました。

(音楽) (クリスマス音楽)

チャブレン 皆さん、ご存じのように、今わたしたちは、この収容所にいますが、神は、わたしたちを神のしもべとして召すために、ここに集められたのです。イエス・キリストは自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」(マタイ 5:44)と言われましたが、ご自信も敵対する人間を愛し、そのために、神であられるのに人間の姿をとり、あらゆる苦しみをなめ、人間の罪の身代わりとして、十字架にかかられました。そして 3 日目によみがえり、今もわたしたちと共におられるのです。クリスマスは、そのイエス・キリストが人となられ、この世に誕生したことを祝う日なのです。

ナレーション わたしは、チャブレンの説教を聞きながら、そこにダンスがいてくれたら、そしてあのマクドナルドが生きていたら、と思わずにはいられませんでした。

それは、本当に心に染みるようなクリスマスでした。シャンペンも、皿一杯のごちそうも、派手なツリーもありませんでしたが、みんなの心の中は、神のみこの誕生を祝う喜びで満たされていました。そしてこの戦争が一日も早く終わるようにと、一同でひざまずいて祈ったのでした。

(音楽)

(クリスマス音楽)

ナレーション

その夜遅く、集会が終わったころでした。

兵士 A

エリオット中尉殿。

エリオット

どうしたんだ？

兵士 A

クリフォード少尉が帰ってきました。

エリオット

ダンスが？ そうか、今どこにいるんだ？

兵士 A

病院です。すごく弱っています。

ナレーション

わたしは急いで病院に行ってみました。そこには、体中が赤黒く腫れ上がったダンスが横たわっていました。

エリオット

ダンス、大丈夫か？ しっかりするんだ。

ダンス

(あえぎながら) 中隊長、お会いできてうれしいです。わたしは、もう…。

エリオット

あまりしゃべるな。ここに来たらもう大丈夫だ。それにしても、どうしてこんなに…。

兵士 B

ダンスは、あちらの収容所でも、日本軍の将校にいらまれていたんです。彼が、仲間にも日本兵にも分け隔てなく、いろいろ親切にしてやったのが、面白くなかったのでしょうか。仲間の一人が、日本兵の食べ物を盗んだという言いがかりをつけられ、リンチに遭いかけたんですが、ダンスは彼を弁護して、身代わりに銃床で殴られたのです。あんないいやつを！ 日本兵は赦せません。

ダンス

いいや、イエス様は、これ以上の苦しみに遭われたのだから、わたしなどは…。でもみんな日本兵を赦してあげてください。イエス様もわたしたちを愛し、赦して下さったんだから。中隊長、今夜はクリスマスでしたね。ご一緒にお祝いしたかった。わたしに、ヨハネ第1の手紙4章7節から9節を読んでくださいませんか？

エリオット

よし、分かった。愛する者たち。私たちは互いに愛し合しましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者は皆神から生まれ、神を知っています。愛のない者に神は分かりません。なぜなら神は愛だからです。神はその一人子を世に遣わし、その方によって、私たちに命を得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。」

ナレーション

その聖書を聞きながら、ダンスは静かに息を引き取りました。その顔は、何とも言えない平安に満ちていました。

それから1年8か月たった1945年8月15日、日本は降伏し、わたしたちと日本兵の立場は、一夜にして逆転しました。

兵士 A 今こそ好機到来だ。おれたちをひどい目に遭わせた日本兵は、直ちに処刑すべきだ。まず筆頭は高橋中尉。ダンスやマックを死に追いやったのはあいつだからな。

兵士 B ああ、あいつは間違いなく絞首刑だ。それに、所長の石田大佐もな。

兵士 A おい、あそこにいるのは高橋だぞ。へん、あの野郎。病気にかかってフラフラしてやがる。へい、高橋、ちょっとこっちへ来い！

高橋中尉 赦してくれ。おれが悪いんじゃない。所長の命令だったんだ。

兵士 B いい加減なことを言うな！ あの収容所が貴様の一存で仕切られてたことは、みんな知ってるんだ！

高橋中尉 頼む、見逃してくれ。

兵士 A うるさい！ 貴様のために死んでいった何百という仲間に代わって、おれが制裁してやる！ 野郎！

エリオット 待て。

高橋中尉 助けてくれ。命ばかりは助けてくれ。

エリオット 高橋中尉。君はわたしの片足がなくなった理由を知っているか？ わたしがまだ岩場で作業をしている時、あなたは発破をかける命令を出しましたね。でもわたしは、あなたを恨んではない。わたしはそれによって、イエス・キリストという方を知ったからです。あなたにもイエス・キリストを知ってほしい。イエス・キリストは、自分の敵をも命懸けで愛されたのです。あなたは病気のようなですね。マラリヤでしょう。フィリス少尉、高橋中尉をすぐ病院に運んで手当てを。

フィリス え？ あ、あの、この人をですか？

エリオット そうだ。戦争は終わったんだ。もう敵も味方もない。現実に病んでいる人間がいたら、手当てをするのが我々の務めだ。

フィリス ...分かりました。

ナレーション こうして高橋中尉は、驚きあきれている仲間の兵士たちをしり目に病院に運ばれ、手厚い看護を受けました。何よりも驚いたのは、当の高橋中尉自身でした。散々にいじめたイギリス兵たちに、なぶり殺しにされても当然なのに、かつてその左足を奪った敵の中尉の保護を受けている。彼には、それがなぜだか分かりませんでした。きっとそれは、何が何でも自分を生かして、間もなく開かれる戦犯法廷に立たせ、死刑に追いやるためなのだろうと考え、日夜、彼は恐怖におののいていたのです。

エリオット 高橋中尉。どうですか、体の具合は？ 顔色も大分いいようだが。

高橋中尉 あ、はい。お陰様で。だが、あんたは一体何でおれを助けたんだ？ おれは、このまま殺されてもしょうがない人間だ。どうしてなんだ？ それも、あんたの信じているキリスト教の教えからなのか？

エリオット そうです。わたしもあなたを憎んでいた。やがて解放の日を迎えたら、この手であなたを絞首台に送ることだけを夢見て、あの地獄の日々を耐えていた。あなたへの憎しみだけが、わたしの生きる糧だった。そのわたしを、ダンスやマクドナルドが変えてくれたんだ。マクドナルドは、人は友のために命を捨てることができるんだということ、身をもって教えてくれた。そしてダンスは、キリストが敵のために命を捨てて愛されたあの十字架だけが、人の憎しみを取り除き、愛する者に変えてくださることを、教えてくれたんだ。高橋中尉、君はあの2年前の収容所のクリスマスを覚えているだろう。

高橋 ん？ あ、ああ。

エリオット あれは、わたしたちの“希望のともしび”だった。真っ暗やみの中にいたわたしたちに、救い主降誕の喜びを知らせ、わたしたちすべての者に、愛によって生き抜いていく力を与えてくれたんだ。君はその許可をダンスに与えてくれた。改めて感謝する。ありがとう。

ナレーション その時、あの鬼のように思えた高橋中尉の顔が崩れて、彼は子供のように泣き出したのです。

高橋中尉 エリオット中尉、ゆるしてくれえ！ おれは、あのクリスマスを許したんじゃない。おれは、クリフォードが憎かった。あいつのせいで収容所の中が変わってきた。あんた方イギリス兵のみか、我々日本兵まで、妙に優しいやつが増えてきて、おれの処刑命令をなかなか聞かなくなった。このままでは指揮統率が乱れて、大変なことになると思った。おれは本気で、あのクリフォードを消すことを考えてたんだ。そこへあいつは、クリスマス集会の開催許可を求めてきた。おれは腹いせに、頑として聞かなかった。するとやつは、開催を条件に、自らをあの T 収容所に移送することを願い出たんだ。あそこに行って生きて帰った者はいない。あいつは、あいつは、自分の命と引き換えに…。おれがクリフォードを殺したんだ！ 赦してくれ！

(音楽) (BGM クリスマス音楽)

ナレーション ダンス、聞いているか？ 高橋中尉は、キリストを信じて、喜びの中で絞首台に上っていったよ。どうか手を広げて、天国に迎えてやってくれ。わたしも、やっと君やマックと同じ信仰に生きることができるようになった気がする。あの1943年のクリスマスを、わたしは決して忘れない。貧しさの中に豊かさが、憎しみの中に愛が輝いていた、あの“戦場のクリスマス”を。

< 完 >